

「2021年インドネシア大学派遣参加報告書」

京都大学文学部3年 坂口綺那

このプログラムに参加して一番印象に残っているのは、インドネシア大学の学生たちの日本に関する知識の豊富さと学ぶ意欲である。インドネシア大学で日本語を学んでいる学生とは、主に共同プレゼンテーションを通して交流した。彼らは日本の食べ物や地名、サブカルチャーをよく知っていた。日本人である私も知らなかったアニメ、現在日本で放映されているドラマやそこに出ている俳優も知っていることには驚いた。まるで日本人と会話していると感じられるほど、彼らは前提知識として日本のことをよく知っていた。さらにネットを通して今の日本の情報も常に吸収しているのだと感じられた。

また、彼らの語学力の高さにも舌を巻く思いだった。主に日本語で行われた彼らとの会話で、特に不自由に感じることはなかった。私たち日本人はプログラムの午前中にインドネシア語授業を受講したが、そこで私は新しい言語を学ぶ難しさを痛感していた。自分自身新しい言語を学ぶことで、母国語以外で会話ができる彼らの能力の高さを再認識させられたのだった。私はプレゼンで同じグループの学生にプログラムに参加した理由を尋ねたのだが、「日本語を話す練習をしたかったから」という答えが返ってきた。このように意欲的に学ぶ彼らの姿勢は私にとってよい刺激になったと思う。

さらにプログラムの午後にはインドネシアの文化体験があった。オンライン開催でも楽しめるようなアクティビティを用意していただいた。中でもインドネシアの伝統料理を作る授業が楽しかった。この授業では、ジャワの伝統料理「SONGGO BUWONO」を作った。料理名はジャワ語で「空/世界を支える」という意味だそうだ。西洋の食文化の影響を受けたこの料理の見た目は、香辛料を多用するインドネシア料理の私のイメージとは異なっていた。シュー皮、ラゲー、ソース、付け合わせからなり、各パーツにもそれぞれ「地球」「国民」「空」「木」といった意味合いがあるらしい。実際に現地でも食べられなかったのは残念ではあるが、現地派遣ならば作ることもなかったであろうインドネシア料理を作ることができたのはよかった。リモートではあったものの、「作る」行為を通してインドネシアの文化を体感するとともに参加者との共時性を感じることができた。

そもそも私はインドネシアの文化について漠然と知りたいという思いから、このプログラムに参加させて頂いた。私は共同プレゼンテーションで食文化をテーマにしたこともあり、食べ物の面からインドネシア文化を学ぶことが多かった。多くの島々からなるインドネシアでは、日本に比べ食文化も地方の独自性が高い。また知識としては知っていたが、ムスリムである彼らの口から「豚肉はあまり食べない」と言うことを聞いて、いかにイスラーム教が彼らの生活に根付いているのかが感じられた。漠然としたインドネシアのイメージが、インドネシアの学生と交流することで少し具体的になった瞬間である。

私のようにインドネシアや他の国についてまずは知りたい、という学生にとってはこのプログラムはとても有益だと思う。私自身プログラムを終えて、インドネシアに行ってみようという気持ちが強くなったとともに、よりこの国について知りたいという探求心も生まれた。少しでも興味があれば、まずは参加してみることを勧めたい。

最後に、このプログラムを企画・運営してくださった先生、関係者の方々、一緒に参加した日本人学生、そして協力してくれたインドネシア大学の学生に感謝を述べたい。家にいながら充実した10日間を過ごせたのは彼らのおかげである。本当にありがとうございました。そしてこの貴重な体験を今後の生活、学業に活かしていきたいと思う。